明治安田生命

第1章　橋を語る

橋の魅力ー日本の橋、関西の橋

1969年から2004年まで、大阪市に勤務して神崎橋、川崎橋、此花大橋などの建設や都市計画、都市工学情報の発信などを担当。主な著書に、『大阪の橋』(松籟社1987)、『日本百名橋』(鹿島出版会 1998)などのある松村博さんに関西の橋について語っていただきました。

大阪市で長年多くの架橋に携わってきましたが、手がけた橋の中で印象深いのは、大川にかかる川崎橋です。天満橋と桜宮橋の間にある斜張橋です。中之島を起点とする自転車道の橋ですが、毛馬桜之宮公園と大阪城公園を結ぶ人道橋としての役割もあります。歴史的背景や、大阪を代表する水辺の風景の中にあるというロケーションを考えながら細部にもこだわったデザインを考えたつもりです。

最近、滋賀県甲賀市の神社に、多くの石の太鼓橋があることに興味を持ち、何度か見に行きました。神社における太鼓橋は神社の神域を画するものですが、石の太鼓橋がなぜこの辺りに集中しているのか、よくわかりません。その一つの太鼓橋の桁に、大阪の日根野の石工がかけたと思われる銘が刻まれています。どうして、大阪南部の日根野の石工がかけることになったのか、興味深いことです。
京都にも、興味深い橋がたくさんあります。例えば、南禅寺の三門に入る手前の池にかかる少し反りのある石橋。京都五山の天龍寺、相国寺などにも見られます。伽藍配置上につくられた泮池(はんち)という池の上にかけられています。京都の鴨川にかかる橋にもそれぞれ歴史があり、おもしろいものもあります。

関西では、平成になってからは大きな橋はあまりかけられていませんが、関西には関東圏と比べて、デザイン的にも自由な発想でかけられた橋が多いように思われます。産官学が協力しやすい土壌もあると思われます。

関西の橋には多くの物語が残っており、歴史的な厚みがある橋が多いように思います。近代橋をかける時にもその地域の文化伝統を重視し、日本的な要素を取り入れるようにすれば、地域に馴染む橋がデザインできるように思います。

橋とは、昔から人々の思いや人生が詰まっている所だと思います。単に通り過ぎるだけでなく、佇めるゆとりがほしい。かける方にも、見て美しく、渡って楽しい仕掛けが必要でしょう。そして、何よりも機能美を重視した橋が増えることを望みます。

石橋の魅力

甲賀市在住の会社員で、日本全国の石橋を訪ね歩き、琵琶湖博物館(滋賀県草津市)で定期的に石橋写真展を開催、好評を博し、滋賀県文化振興事業団「2013 文化で滋賀を元気に!賞」を受賞した石橋研究家の森野秀三さん。北海道から沖縄県の西表島まで、全国の石橋を見て回られ、中でも興味深い関西の石橋について熱くお話しいただきました。

日本全国、全都道府県に石橋がありますが、九州には全国の9割以上の石造アーチ橋があり、長崎県の眼鏡橋がその代表と言えます。九州は火山性の石橋に適した石が採れることと、大雨や台風が多いため、木橋だと流されてしまうため、石橋が必要だったこと、そして、石造アーチ橋を造る技術集団「肥後(現在の熊本県)の石工」が育っていたことです。関西では寺院や神社の周囲や庭園に石橋が造られました。大阪市の雪鯨橋は鯨の骨の欄干の珍しい石造アーチ橋です。

京都府には琵琶湖疏水を設計した田辺朔郎の設計した亀岡市の王子橋などの石造アーチ橋、大谷本廟円通橋や伏水街道第四橋など九州にはない全円アーチの石橋があります。滋賀県では雨乞いや厄除けなどの神事が多いので、神社にはそのお礼として寄進した石の太鼓橋が数多くあります。その代表が多賀大社の太閤橋で、豊臣秀吉が母の病気治癒のお礼に寄進したと言われています。

兵庫県南あわじ市の賀集八幡神社八幡橋を阪神淡路大震災の後訪れました。淡路市の太鼓橋は震災で崩壊していましたが、この八幡橋は欄干が崩れていたものの、石造アーチ橋本体は何もなかったので感動しました。兵庫県三木市の御坂サイフォン橋は関西で一番大きな石造アーチ橋で、日本の「近代水道の父」と言われるイギリスのパーマー氏設計の水路橋です。現在は二つ並ぶコンクリート橋の方が現役です。大阪市羽曳野市の放生橋はおそらく関西で石の太鼓橋としては一番古いと思われ、高さがすごいので驚きです。近年柵が立派になり、お祭りで開放される時以外は見づらくなったのが残念です。

奈良県奈良市の奈良街道にある石の道路橋は見た目では石橋に見えませんが、佐保川に下りると石橋部分と増幅されたコンクリート部分が判別でき、石橋はビクともしていないのに、コンクリートにヒビが入っているのがわかります。前述の亀岡市の王子橋は、色が異なる石を交互にバランスよく配置しています。特にアーチ部分の「夫婦天端」は五角形の見事な輪石です。和歌山県すさみ町中山神社参道橋にはシンプルな石造アーチ橋があり、この地にそうした技術があっただけでも驚きです。滋賀県長浜市木之本の太鼓橋には驚きの高さの太鼓橋があります。木之本地蔵にたくさんの参拝者がいるのに、その裏にあるこの神社が静かなのもいいです。

石橋は絵になるので、自治体が発行する冊子等の表紙やホームページなどに、是非使用してもらいたいものです。また、現地に由緒などを記した説明板があれば、地元住民の関心も高まります。私は、保存とは見せることだと思います。橋には通常利用する「渡る橋」と、「見せる橋」があっていいと思います。各地の石橋には郷土の歴史を伝える生きた教材としての役目もあるからです。

明治安田生命

第2章　関西の橋探訪 ― 橋から知る歴史、文化

滋賀県 大津市

日吉大社大宮橋、走井橋、二宮橋(大宮川)

日吉大社大宮橋

三つの橋は、それぞれデザインも異なり、それぞれの美を表していながら、共通して"聖と俗"の対比によって役目を果たしている。"神の世界へ通ずる橋"として、これらを創り出した先人の知恵と情熱と想う時、現代に生きる我々も「かくあるべし」と心新たに前を向く勇気がわきます。(井口　健　日吉大社禰宜)

滋賀県 甲賀市

矢川神社太鼓橋

矢川神社太鼓橋

記録では、1671(寛文11)年に架橋されたとされ、甲賀市の代表的な石橋と言えますが、大鼓というほど、中心部が高くなっていないのも特徴です。太鼓橋越しに、茅葺き棟門がありまして、この橋と、同じく甲賀市内にある水口神社の橋は、他県にはあまり見ることのない大きな石の太鼓橋です。お祭りの時には神興をかついで渡っていたと云われていますが、大人が上がれなくても、小学生がとかったりするのを見ていると、子供の成長を見るようで微笑ましいものがあります。(森野秀三　会社員・石橋研究家)

京都府 京都市

三条大橋(鴨川)

三条大橋

三条大橋のシンボルといえば、擬宝珠(ぎぼし)です。欄干に取りつけられたコケシのような飾り、北側と南側の西詰めから2つ目の擬宝珠にそれぞれ刀傷が残っています。新選組によってつけられたものです。その部分に手を当てると、幕末の動乱期の息吹が伝わってきます。剣の達人、沖田総司なら擬宝珠に刀を当てることはなかったやろなぁ~などと想像すると楽しいです。(武部好伸　エッセイスト・作家)

行者橋(白川)

行者橋

京都東山の知恩院古門近くにかかる石橋である。平安神宮から流れ出てきた清流白川にかかり、長さはわずか10e程度、幅66eorで、すれちがいができない、橋中央からは北側が望め、右岸、左岸の柳の枝が白川に映える。石橋は、8枚の石を組み合わせただけの素朴なものである。この橋は比叡山の阿闍梨修行で、千日回峰行を終えた行者が、裏山口から京の町に入るときに最初に渡る橋である。私は、軍国少年知恩院下の大学に通勤していたころ、20歩くらいでゆっくりと渡っている。1人しか通れないので、渡っている人がいれば渡り切るまで待つ。時折しみじみと、千日回峰行の荒行を終えた行者の方々の橋を渡られた気持ちと修行のすさまじさに思いをはせる。(木金清博　京都華頂大学教授)

大徳寺、孤篷庵にかかる橋

孤篷庵にかかる橋

孤篷庵は、小堀遠州の庭と茶室、それに遠州の墓もあるすばらしい庭である。茶室と「近江八景の庭」とを遮るのが、雪見障子のルーツ、西白除けと謂りロを兼ねる。このような遠州らしい大胆な意匠が随所に盛り込まれている。この空間を外界と区切っているのが石橋。巨石を高欄に使用し、橋形に手まじめでいるが、高欄の下部もまた橋形に大ぐって構造美を形成している。この橋の下には　じつは空洞。つまりは、渡る橋ではなく、現として外界と分ける構成のではないか。結界の橋という言い方もできる。このような結界の役割を果たす橋は、京都ではいくつもみることができる。(中村進衛　編集者・京都盛信社代表)

大阪府 大阪市

肥後橋(土佐堀川)

肥後橋

「良けんとき ヴォーリズ満喜子の種まく日々」(新潮社)執筆のため、肥後橋に仕事場を持ちました。堂島川を越え、土佐堀川にかかる橋は、かつて商都として賑わった"大阪"の空気を残します。件中でも、主人公満喜子がヴォーリズ氏と伝之進、2人の間でどちらに渡るか、揺れる女心の橋としました。思い出深い橋です。(玉岡かおる　作家)

淀川大橋(淀川)

淀川大橋

15年くらい前、淀川大橋の下の草むらで子どもとよく虫取りをしました。蝶々、バッタ、トンボ、カマキリなど、実にさまざまな昆虫がいました。夏から秋にかけ、淀川大橋に向かって、子どもと一緒に自転車で通いました。その後、その草むらは一掃され、当然、虫たちはいなくなりました。こうして自然と触れ合うスポットがなくなってゆくんだな、と感じました。淀川大橋を渡るたび、その当時のことを思い出すのです。(古山喜章　経営コンサルタント)

大阪府 高石市

伽羅橋

伽羅橋

伽羅は実南アジアに生育する香木「沈香」の高級品のこと。東大寺正倉院の宝物として名高い。高盛で香り高い名前のついた石橋が高石にあるのだしかも南海高師浜線の駅名にもなっており、40数年前、近くに住むようになってびっくりした。もとは紀州街道が芦田川を渡る地点にかけられていたが、今は工業地帯の高砂公園に移築。長さ11m、幅4.5mの立派な橋で1865(慶応元)年の完成。「和泉名所図会」1612(寛政7)年には「昔この橋長は次第なり」とあるんこれを完ってそ真の銘を残した」とあるが、書木の理由は明記されていない。かつて橋のあった周辺は近年、奥眉調査の結果、中世に港町で栄え、大寺院の存在を確認されている。大きな可能性を秘める伽羅橋の変化の地としては余りにも寂しい。(山口安昭　泉大津市文化フォーラムマネジャー)

兵庫県 神戸市

明石海峡大橋(明石海峡)

五色塚古墳から見る明石海峡大橋

明石海峡大橋を垂水(神戸市)の海岸に築かれた五色塚古墳(4世紀末～5世紀初)の上から眺める超臨場感は特別のものがある。明石海峡は万葉人から明石大門と呼ばれ、都と地方を結ぶ関門であり、時速10km の潮流の速さで難所として知られていた。そこに現代の最先端技術を集めて造られた明石海峡大橋と、古代の巨大建造物である前方後円墳、この2つの間に挟たわっている千数百年の時の流れを考える時、人は小さく、また大きいと実感できる。(八十宮巳　播磨考古学研究会代表)

大輪田橋(兵庫運河)

大輪田橋

平清盛が造成した大輪田泊の名を受け継いだ兵庫運河を渡る橋。橋西側には清盛塚(十三重塔)や家物語にちなんだ琵琶塚が位置する。そして橋東側下には神戸空襲の犠牲者と防空壕が残る小央郵売市場の管理)。橋塔が残るほか、変型もない橋ではあるが、神戸のスタートでもあるこの輪田泊を思い起こさせる数少ない存在でもあり、一方で近代神戸港の発展の基となった兵庫運河を渡り、太平洋戦争の恵みとして提供を話ることニつの場を結ぶ。橋の東側(清盛塚側)には一遍が亡くなった真光寺が位置し、また清盛橋と名を変えた第五橋が南の楽仙寺(後醍醐天皇の伝承有りと)を結ぶ。(平佐見陣之　滋賀大学教授)

奈良県 奈良市

絵屋橋(軍川)

絵屋橋

江戸時代、春日大社や興福寺の「絵所」の絵師が住んでいた絵屋町が名前の由来である。ところが、軍川は1992(平成4)年に猿沢池から西が暗渠になり、絵屋橋も跡を残すのみとなった。さらに、猿沢池沿いの部分も蓋をして、その上に観光ゾーンとして人工の川を設ける計画が持ちとがった。猿反乱したのが、絵屋橋の南で料理店「まんぼくよ」を営む故絵谷真康さんだった。1740(宝保2)年に建った奈良町最古の町家の主人である。「家庭排水の流れ込む川ではあるが、古地図に載る歴史ある軍川を訪下水に下しておかん」という問いかけに計画は中止され、猿沢池沿いの軍川は三面コンクリート張りとはいえ、今も本物の川である。(神野武美　フリージャーナリスト)

奈良県 御所市

瑞駕橋(葛城川)

瑞駕橋

瑞駕橋は御所市の旧市街地の南西端、葛城川にかかる長さ32.5mの鉄筋コンクリート構造の充腹アーチ橋です。いわゆる高野道にかけられた橋で、コンクリート橋でありながら石造り風の化粧が施されています。親柱には「昭和三年三月吉日」と記されています。この橋の大きな特色は、アーチのキーストーンにライオンの頭部のレリーフが装飾がに取り付けられていることと、また橋状のアーチ迫石と曲線状デンティルッを用いるなど、印象に残るデザインが施されていることです。親子のモチーフも泉良典の「泉」の文字を図案化したもののように見えます。(石田成年　柏原市立歴史資料館)

和歌山県 和歌山市

中橋(内川)

中橋

和歌山城がパラマッタ市に見える場所の一つで、内川にかかる中橋の延長上に見える天守閣がある。鉄骨のトラスが組まれたこの形は、鉄道橋として駅舎みがある。和歌山市道路管理課の供用台帳によると1953(昭和28)年に架けられた全長30.5m、幅5.3mの橋で、道路橋として使われている。鉄道の各線で明治末期まで橋梁トラスとして製作されたのが全長100フィート(約30m)の車線ボーマワーレントラスと呼ばれるもので、東海道線京都の枝川に架かっていた鉄道橋である。明治の時代に信島県勝浦川に移され、和歌山大空襲で焼失した中橋に変り、戦後現在の位置に信島から移設された橋である。現代で3回目のお勤めをしていることになる。(中西重裕　株式会社一級建築士事務所KSAアーキテクツ)

和歌山県 上富田町

山王橋(富田川)

山王橋

上富田町を貫流する富田川には「諸水橋」がこつある。そのニつ山王橋は1960(昭和35)年に架橋された。この橋に特別な思いを持つのが、上富田町出身の歌手坂本冬美さんである。中学の時ソフトボール部だった彼女は練習で汗をかいた後、仲間と通称赤橋(山王橋)から川に飛び込んで泳いだりしていた。その赤橋が2011(平成23)年秋の紀伊半島大水害で流失。そんな光景を目の当たりにした彼女は涙したという。2013年成功2年に再架橋。彼女の故郷の思風景を歌い込んだ「おかえりお(おまえ)りの(ご)ジャケット」にも赤橋が使われている。(上田修司　和歌山放送紀南支社長)

Copyright Meiji Yasuda Life Insurance Company All Rights Reserved

明治安田生命

第3章　橋に想う

角野幸博(関西学院大学教授)

30年ほど前に、上田篤先生が『橋と日本人』(岩波新書)を上梓されました。その数年前から研究室で文化論としての橋についてのディスカッションがあったことを思い出します。これらを越える発想がなかなか思い浮かびません。橋は「つなぐ」と「隔てる」の両義性をもつ装置であり、時には広場としての場所性が浮かび上がる装置です。「橋の下」にも刺激的で魅力的なものがたくさんありますしね。

佐伯順子(同志社大学教授)

鴨川、淀川、木津川、箕面川等、日常生活の一部に川や山が身近にあり、こぢんまりとした橋がかかる関西の風景は、文学や絵画のモチーフとして文化の源泉ともなり、人々の日常生活を癒す。あまり大規模でなく、近代的過ぎない意匠の橋を、関東の橋とは違う個性として打ち出し、関西ならではの景観形成、史跡保存として生かして欲しい。

弘本由香里(大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所特任研究員)

関西は間違いなく水とともに発展してきた。橋の宝庫でもある。それほどの宝を抱えていながら、身近にあり過ぎるせいだろうか。案外橋を大事にしていないように思えてならない。橋のフィールド・ミュージアムとして、橋ツアーが建築ツアーとともにもっと活発に行なわれるとよいし、橋の絵図やポストカードなども徹底的にこだわったものがあると面白い。

寺田　操(詩人・コラムニスト)

文学遺産としての橋を探索したい。橋にまつわる記憶といえば、近松門左衛門の浄瑠璃をぬきには語れない。幕府直轄の「公義橋」と、商人や川の両岸の町人たちが費用を出した「町橋」を縦糸に、人々が起こした事件と哀感を遠い記憶の底から船に載せて運んできてくれる。『摂津名所図会』などに描かれた橋のなかには『心中重井筒』の舞台となった中橋(相合橋)のように消えた橋もある。だからこそ引き寄せてみたい。

藤田真一(関西大学教授)

東京の日本橋が高速道路に圧せられているようですが、大阪も中之島の景色にちょっぴり残念な気持ちがします。水の都大阪のシンボルとして、川と橋の調和を望みたいものです。とくに「浪華三橋」のイメージアップが望まれます。橋は昔から、国と国、町と町、村と村、人と人をつなぐものであり、いくつもの時代を渡すものだったことをもっと自覚したいものです。

Copyright Meiji Yasuda Life Insurance Company All Rights Reserved.